恵慶集と如意宝集

――恵慶集と撰集との関係――

熊本守雄

はじめに

如意寶集の現存断簡所載歌五十四首の内、二首が恵慶法師の歌で、この二首の歌は共に恵慶集に見えている。

(一)

近衛家旧蔵「如意宝集目録」によると、

巻序	部立	全歌数
第一	春	七二首
第二	夏	四〇首
第三	秋	七七首
第四	冬	四一首
第五	賀	三六首
第六	別	四七首
第七	戀上	一〇三首
	戀下	一〇二首
第八	雑上	八六首
	雑中	八六首
	雑下	八五首
合計		七七五首 内一首長歌

上図のようにあって、その組織及び歌数は知り得るが、如意宝集の完本の存在は知られていないから、全内容を知ることはできない。久曾神昇氏の報告（註1）によって知り得る現存断簡所載歌五十四首のうち、古今集所出の十六首を除き、三十八首全てが、拾遺抄及び拾遺和歌集に見えており、殊にその歌の排列順序まで殆んど全く一致していることによって、如意宝集が拾遺抄及び拾遺和歌集と極めて密接な関係にあることが想像できる。

たとえば、日葬帖所載の如意宝集の一葉に次の如くある。

「如意寶集　巻第□（二カ）

夏

冷泉院の東宮におはしましける時
百首の和歌たてまつりけるなかに
帯刀長源重之

はなのいろにそめしたもとのをしけれは
ころもかへうきけふにもあるかな

なつのはしめによみはへりける
盛明親王　十五

はなちるといとひしものをなつころも

たつやおそきとかせにまつかな
四月さけるさくらをよめる　伴　判定
あはれてふことをあまたにやらしとや
はるにおくれてひとりさくらむ　」

この巻頭の二首は、そのまま拾遺抄の巻頭となっている。二首の歌のみならず、その詞書きや作者名までも、全く同一であり、更に、それがそのまま巻頭になっていることを考えると、如意宝集と拾遺抄とは、極めて酷似していたものと知られる。

又、先ほど述べた三十八首のうち、一首ずつに分離している八首を除き、二首以上連続していて、その排列順序を考え得るものが三十首あるが、それを拾遺抄と比較すると、二首ずつ相接しているものが八組（十六首）、三首ずつ相接しているものが二組（六首）で、唯四組（八首）のみが拾遺抄の順序と一致しない。だが、それらはいずれも、間に一首をおいて相接している。

次に、拾遺和歌集と比較するに、三首連続しているのは唯一組（三首）、二首ずつ相接しているものが七組（十四首）となっていて、拾遺抄の場合と比較して、三首連続の一組が一首分離し、二首連続の二組が分離している。

（註1）古典文庫『平安稀覯撰集』および風間書房刊『西本願寺本三十六人集精成』

（二）

ところで「かはやなきいとはみとりにあるものをいつれかあけのころもなるらむ」の歌の作者は、如意宝集及び拾遺抄に於いては恵慶法師とあるのに、拾遺和歌集では仲文となっている。

「（如意寶集　巻第八）
（雜中）
かうふりやなきをみはへりて　恵慶法師
かはやなきいとはみとりにあるものを
いつれかあけのころもなるらむ
（夏蔭堀所載）　」

《拾遺抄　巻第十　雜部下　》

546　雨ふる日、大原河をわたり侍けるに、ひるのあしたに
つきて侍ければ　禪慶法師
世中にあやしき物は雨ふれど大原川のひるにざりける　（五五〇）

三条のおほいまうち君の家のかべの穴に、旅人の盗人
にあひて侍けるかたかきて侍ける　藤原為頼

548　ぬす人の籠山の山に入にけりおなじかざしの名をやながさん　（五六〇）

549　同絵に白馬引処に　恵慶法師
難波江のあしのはな毛にまじれるは津の国かひの駒にや有らん　（五三七）

550　かうぶりやなぎを見侍て
かはやなぎ絲はみどりに有物をいづれかあけのころも成らん　（五五一）

551 能宣がもとに、車のかもこひにつかはしたりけるに、
なしといひ侍ければ　仲文
552 鹿をさして馬といふ人有ければかもををしと思ふなるへし
（五三五）
かへし　能宣
なしといへば惜むかもとや思ふらん鹿や馬とぞいふべかりける
（五三六）

《拾遺和歌集　巻第九　雑下》

能宣に車のかもをこひにつかはして侍けるに、
侍らずといひて侍ければ　藤原仲文
（五三五）かをさしてむまといふ人ありければかもをもをしとおもふなるべし　551
返し　能宣
（五三六）なしといへばをしむかもとやおもふらんしかやむまとぞいふべかりける　552
廉義公家のかみゑに、あをむまある所にあしの花毛の馬あるところ　恵慶法師
（五三七）なには江の蘆のはなげのまじれるはつのくにかひのこまにやあるらん　549
雨ふる日、おほはら川をまかりたわりけるに、ひるのつきたりければ　恵慶法師
（五五〇）よのなかにあやしき物は雨ふれどおほはら河のひるにぞありける
かうぶり柳を見て　仲文
（五五一）かはやなぎ糸はみどりにあるものをいづれかあけのころもなるらん　550

拾遺抄では、550「かはやなぎ絲はみどりにあるものをいづれかあけのころも成らん」の歌の作者は、すぐ前の549の作者と同じで、恵慶法師となる。ところが、拾遺和歌集の方になると、（五五一）の歌に見えている如く、作者は仲文であることになる。

拾遺抄と拾遺和歌集とに於いては、右に見た如き相違がある。私の調べ得たところでは、拾遺抄と拾遺和歌集との間で、作者名に相異のある箇所は三十八もある。

拾遺抄と拾遺和歌集とで作者名を異にしていて、かつ、それが如意宝集に見えている場合がもう一例ある。即ち、如意宝集では、「みよしのゝやまのしらゆきつもるらしふるさとさむくなりまさるかな」の歌に「弾正親王妹のかうい」とある。これは、拾遺抄と一致するが、拾遺和歌集では「忠見」となっていて、異なっている。

これらを合わせ考えると、拾遺抄の撰者と拾遺和歌集の撰者とが同一人であるとは、まずもって考えられない。そして、関係があるとすれば、拾遺抄は、拾遺和歌集とよりも如意宝集の方に、より密接な関係があるといえる。又、如意宝集を中心にして言うと、如意宝集は拾遺抄と直接関係があり、拾遺和歌集とは間接的関係が存するに過ぎないことがわかるのである。

つまり、現在通説になっている拾遺抄の撰者は藤原公任で、拾遺和歌集は公任以外の者の撰で、おそらく花山院の親撰であり、源道済や藤原長能などが花山院を助けて撰集に参加したものであろうとか、又、この二つの撰集の相互関係は、拾遺抄から拾遺和歌集へと増補された関係であろう、といった考えにそって、先のことを理解することができる。又、如意宝集が拾遺抄と極めて密接な関係を保持しており、成立は拾遺抄以前で、撰者は、拾遺抄と同じく、公任

であろうといわれているが、このことも先に見て考察した箇所に関する限り、首肯できるように思う。

（三）

さて、拾遺和歌集に於いては、（五五一）の「かはやなぎ糸はみどりにあるものをいづれかあけのころもなるらん」の作者は仲文となっていたわけだが、なぜ、そうなってしまったのであろうか。そのことも、拾遺抄が増補されて拾遺和歌集になったからであると考えれば、理解できよう。

即ち、拾遺抄に於いては、550「かはやなぎ絲はみどりに有物をいづれかあけのころも成らん」の歌の前にも、同じ恵慶法師の歌である、549「難波江のあしのはな毛にまじれるは津の国かひの駒にや有らん」の歌が置かれてある。又、後の551には仲文の歌がある。言葉を換えていうと、拾遺抄に於いては、恵慶法師の歌が549550と二首続けて収載されている。それで、後ろの550の歌には、あらためては、恵慶法師という作者名を付さないでいる。そして、その後に551の仲文の歌を置いているのである。こうした歌の配列順序をとっている拾遺抄の歌の順序を改め、拾遺和歌集を編んだところに（五五一）の歌の作者を仲文としてしまった因があるものと考えられる。

ここで、少しく想像をたくましくすれば、拾遺抄から拾遺和歌集への増補改訂にあたって、歌の順序を変更するに際して、おそらく短冊か何かを用いたためであろうかとも思われるのだが、まず歌を機械的にバラバラにしてしまったものと思われる。つまり、拾遺抄の550「かはやなぎ絲はみどりに有物をいづれかあけのころも成らん」の歌についても、作者名を補うということをしないままで、単独の歌にしてしまう。それから、いろ〳〵順序を変えて、拾遺和歌集に見るような位置に定着させる。

だが、この歌には作者名が付いていないわけである。拾遺抄のような位置に於いてであれば、「かはやなぎ」の歌には作者名を付さなくてもよかったわけであるが、大きく歌の配列順序を変えた拾遺和歌集に於いては、そのままというわけにはいかない。そこで、あらためて拾遺抄の方を点検して、作者名を確かめようとした際に、眼移りでもして、拾遺抄ですぐ後にある551の歌の作者であるところの、仲文の名を見てしまい、「かはやなぎ絲はみどりに有物をいづれかあけのころも成らん」の作者として、誤って仲文の名を書いてしまったものでもあろうか。

あるいは、拾遺抄が546の歌の作者を禅覆法師としているものを、拾遺和歌集では、（五五〇）に見る如く、誤って恵覆法師の歌としてしまったものではあるが、とにかく恵覆法師の作と判断した歌のすぐ後ろに、（五五一）として「かはやなぎ」の歌を置いていることを考えると、拾遺和歌集に於いても、初めの方針としては、この（五五一）の歌には作者名を書かないでいて、前の歌の作者名をうけて、「かはやなぎ」の歌の作者も恵覆法師としていたのかもしれない。が、少し時を経ると、先程想像したように、拾遺和歌集に於いては、拾遺抄とは歌の前後がいれかわるなど順序が大きく異なっているところから、作者名の書いてない歌にはあらためて作者名を補わなくてはならないのだ、ということが拾遺和歌集の撰者の頭にはあって、脳裏を離れなかったものだから、ここの（五五一）の歌についても作者名が記してないというわけで、気をまわして作者名を補おうとして、拾遺抄の方で確かめた際に、眼移りでもして、すぐ後にある歌の作者名を見てしまい、誤って仲文としてしまったので

あろうか、などと妄想をたくましくする。

だが、そのようにでも考えないと、拾遺和歌集に於いて「かはやなぎ」の歌の作者を仲文としていることが了解できないのである。因みに、仲文集の方をみても、この歌は収載されていない。即ち仲文集は自撰ではあっても、後半の部分には他者の手が加わっているらしい形跡の見られるものだが、そのような仲文集にも「かはやなぎ」の歌は見えていないのであるから、拾遺和歌集がこの歌の作者を強いて仲文とする拠りどころはないといえる。

やはり、機械的な操作のうちに生じた誤りであろうと思われる。

(四)

以上、まわりくどい説明ではあったが、「かはやなぎ糸はみどりにあるものをいづれかあけのころもなるらん」の歌の作者は恵慶法師であるといってよかろう。

つまり、この稿の「はじめに」に於いて、如意宝集には現在二首の恵慶法師の歌が見出されるといい、(二)節で、その一つである、夏薩帖所載の次の歌を挙げた。

「(如意寶集　巻第八)

(雜中)

かうふりやなきをみはへりて

恵慶法師

かはやなきいとはみとりにあるものを

いつれかあけのころもなるらむ」

しかし、この歌には、拾遺和歌集のように作者を仲文としたものもあったわけである。

だが、以上見てきたように、恵慶法師の歌と断定してよかろうと思うのである。

このように断言するに際して、「かはやなぎ」の歌が、次のように、自撰になる恵慶集にみえるということは、大きな支えになろうかと思われる。

《　恵慶集　図書寮150・558本(古本系統)　》

かうふりやなき

かはやなきいとはみとりもあるものをいつれかあけのころもなるらん

<50>

《　恵慶集　図書寮501・401本(定家本系統)　》

かうふりやなき

あをやきのいとはみとりにある物をいつれかあけの衣なる覧

(49)

ここで、如意宝集と恵慶集との関係をみると、如意宝集の本文が書陵部蔵(図書寮150・558)本の本文により近いことがわかる。第二句が、如意宝集で「いとはみとりに」とあるのに対し、図書寮150・558本では「いとはみとりも」とあって「に」が「も」とあり、この一字が違っているだけである。この相異を、図書寮150・558本に於いて転写の途中で生じた誤写であると処理することは、安易に過ぎるであろうか。図書寮150・558本では「も」とあるが、これが「よ」を写し間違えたものである可能性も大きいように思われるのだが。

現在世間に広く流布している恵慶集は、書陵部蔵(図書寮501・401)本以下の定家本系統(註2)のものであるが、その本文だと、第一

句が「あをやぎの」となっており、図書寮150・558本恵慶集の本文や如意宝集・拾遺抄などにとられているものとも大きく異なっている。如意宝集が採取したのは、図書寮150・558本で代表される古本系統

（註3）の本文からであるように思われる。

（註2）恵慶集には、定家本系統の伝本と古本系統の伝本との二類があり、現在最も流布している恵慶集は定家本系統で、その祖本にあたる定家自筆本を極めて忠実に模写していて、自筆本の原型を正確に伝えていると目される写本が伝わっている。その伝本及び定家本系統の恵慶集については、「図書寮本恵慶集（501・401）について――定家自筆本の原型――」（『国文学攷』第32号）を参照されたい。

（註3）定家本以前の完本のおもかげを残し、古本の姿を伝えている、古本系統の恵慶集については、「古本系統の恵慶集について――関西大学蔵（岩崎美隆文庫）本と書陵部蔵（図書寮150・558）本――」（『国語国文』昭和四十一年八月号）を参照されたい。

（五）

恵慶法師の歌で、如意宝集に採取されているもう一つの歌は、次の歌である。

「如意寶集　巻第四

つきをみはへりて　恵慶法師

あまのはらそらさへさえやわたるらむ

こほりとみゆるふゆのよのつき」

この歌は、古今和歌六帖や拾遺抄・拾遺和歌集にも収載されている。

そして、この歌は、恵慶集によれば、某年十二月或所歌合の際の歌である。

≪恵慶集　（古本系統）図書寮150・558本≫

十二月ある所に哥合せさせたまふ

松の雪

<105> むらたつのやとれるえたとみるまてにまつのしつえをうつむ白雪

庭梅

<106> 白雪のふるとしなからにはのむめまつこちかせにゝほひやはせぬ

いけのこほり

<107> なみよするあしのうらへもをとせぬはいけのこほりやとちはてぬらん

冬のよるの月

<108> あまのかはそらさへさえやわたるらんこほりとみゆるふゆのよの月

≪恵慶集　（定家本系統）図書寮501・401本≫

十二月ある所の哥合せさせ給しに

松　にはのむめ　冬月　池のこほり

(100) むらたつのやとれるやたと見るまてにまつのみとりもうつむしらゆき

にはのむめ

(101) 白雪のふるとしなから庭の梅は花とかこちてにほひやはせぬ

(102)　池の氷

浪よするあしのうらはもをとせぬは池の氷やとちはてぬらむ

(103)　冬のよの月

あまのはらそらさへ　やまさるらむこほりと見ゆる冬のよの月

図書寮150・558本に於ける歌の語句と、図書寮501・401本に於ける歌の語句とには相異するところがある。まず、第一句が異なっている。前者が「あまのかは」としているのに対し、後者は「あまのはら」としている。第三句に於いても、前者が「わたるらん」という本文であるのに対して、後者は「まさるらむ」となっていて、異なっている。

又、如意宝集に於けるこの歌の語句も、それら二種類の恵慶集のどちらの本文とも完全には合致しない。第一句についていえば、後者の図書寮501・401本の本文が如意宝集の本文と同じであり、第三句は、前者の図書寮150・558本の本文が如意宝集の本文と一致している。

つまり、如意宝集に於けるこの歌の語句と、恵慶集に於ける歌の語句とは完全には一致しないが、公約数的な一致の仕方をみせているわけであって、同歌とみなすことができる。

如意宝集は「あまのはら」の歌を何を通してどういう経路で収載したのであろうか。

古今和歌六帖にもこの歌が採取されているのであるが、それには作者名が記されていないから、古今和歌六帖を媒介としたということは有り得ない。

それでは、次に、この歌は、恵慶集によると、歌合の時のものであるから、それから直接に採取するということは考えられないであろうか。某年十二月或所歌合の歌などを書き留めた記録の類から、直接にこの歌を採取したというケースも考えられないことではないが、この歌合の性格からして、まずそういうことはあるまいと思われる。それは、恵慶集の詞書に「ある所に哥合せさせ給ふ（ある所の哥合せさせ給しに）」と敬語を用いているところから感じられることである。この詞書きから、この歌合の成立事情と雰囲気とを想像することができる。四題四番で、しかも悉く冬の季題に限られていることを考えると、内容的には極めて小規模で、かつ私的な歌合ではなかったかと推察される。したがって、世に広く知られるということのなかった歌合であったように考えられる。つまり、この歌合の歌は類聚歌合などにも採録されてはおらず、恵慶集によってのみ存在の知られる歌合なのである。「あまのはら」の歌をば、歌合の記録類から直接に採取した歌だとは考え難いといったのは、前述したような理由によってである。

如意宝集が「あまのはら」の歌を採取したのは、恵慶集を通してであろう、と私は考える。それも、図書寮501・401本などの定家本系統の本文からではなくて、図書寮150・558本に代表される古本系統の本文に拠ったものではなかろうかと考えるのである。

第三句についてみると、如意宝集と古本系統の恵慶集と（それに古今和歌六帖・拾遺抄・拾遺和歌集）が「わたるらん」としているのに対し、定家本系統の恵慶集は「まさるらむ」としている。如意宝集と定家本系統の恵慶集との間には、かなり大きな隔りがあるといえる。

それと同じような、如意宝集と相異するところは、古本系統の恵慶集の方についてもあるわけだが、それであってなお、古本系統の

恵慶集の方から、如意宝集は、歌を採取したのであろうと推察するのは、如意宝集にみられるもう一つの恵慶法師の歌であるところの、「かはやなき」の歌も古本系統の恵慶集から採取しているらしいからである。それに加えて、古本系統の恵慶集の第一句が「あまのかは」となっていて如意宝集や定家本系統の恵慶集などの「あまのはら」とは異ってはいるけれども、このような相異は類推が働いてよく生ずる誤写であると思うからである。即ち、古本系統の恵慶集に於いても、最初は「あまのはら」であったが、それが転写されていく途中で、類推などが働いて「あまのかは」と変っていくということも大いに有り得ることだと考えるからである。つまり、如意宝集が採取した頃の恵慶集の本文と、現在伝わっている恵慶集の本文とが異なるということは、大いに有り得ることだと思うのである。

では、ここで強いて定家本系統の恵慶集の方を除外して、古本系統の恵慶集の方にのみ限定して、如意宝集との関係を云々する取り上げ方をするのはなぜかといえば、それは、現在の時点から見て、古本系統の恵慶集の方がより正しく恵慶集原本の姿を伝えていると思われるからでもあり、かつ又、当時に於いて流布していた恵慶集が古本系統のものらしいからである。（註4）

もちろん、そのことに加えて、古本系統の本文の方が如意宝集の本文に定家本系統のそれよりも――比較的の問題ではあるが――より近い形を持っていることが大きく関与してはいるのだが、如意宝集は図書寮150・558本に代表される古本系統の恵慶集から歌を採取した、と説明する方が自己をより納得させ得るからでもある。

（註4）詳しくは、前掲の「古本系統の恵慶集について――関西大学蔵（岩崎美隆文庫）本と書陵部蔵（図書寮150・558）本――」を参照されたい。

(六)

先のようなケースをみてくると、古本系統の恵慶集の本文よりもかえって、嘗てはそれから歌を採取したところのものではあっても、古今和歌六帖や如意宝集や拾遺抄などの私撰集とか、拾遺和歌集のような勅撰集の方が、本来の正しい歌の詞句を伝えているということも有り得ることだと思われる。

古本系統の恵慶集の本文と、定家本系統の恵慶集の本文との間には、かなりの相異がみられたが、そのように、私家集の中に於いては、比較的に歌の詞句が改変されやすく、移り易い性格を持つようにも思われる。だが、その歌も一旦撰集に収載されたとなると、その歌の詞句は固定するという面が多分に有るように思われる。殊にそれが勅撰集の場合だと尚更のことで、書写者の恣意による改変は全くと言っていい程になくなることが、先の例からも感じられるのである。つまり、勅撰集などの撰集では考えられないことだが、私家集では、無意識のうちに生じる誤写の他に、書写者の恣意によって歌の詞句の変っていくことが、大いにあると思われるのである。

このように考えてくれば、如意宝集が恵慶集――それも古本系統の――を通して「あまのはらそらさへさえやわたるらむこほりとみゆるふゆのよのつき」の歌を採取したと考えても大過ないのではあるまいか。

おわりに

恵慶集には、藤原道兼が正暦元年（九九〇）以後に造営したとこ

ろの、栗田山庄の障子絵を詠じた歌が収載されているから、それの成立は正暦元年以後のことである。（註5）

又、久曾神昇氏の御考察（註6）によるならば、如意宝集の成立は、長徳二年（九九六）四月ないし同年十二月の間ということである。

この小稿で考察してきた如く、如意宝集が恵慶集から歌を採取している事実から考えて、恵慶集の成立の下限は、如意宝集の成立時であるところの、長徳二年と考えてよかろう。

即ち、恵慶集の成立は、正暦元年（九九〇）以後長徳二年（九九六）までのことであると考えられる。

（註5）詳しくは、別稿「栗田山庄障子絵と和歌と漢詩――恵慶集と江吏部集――」に発表予定。

（註6）前掲『西本願寺本三十六人集精成』

（山口県立山口女子短期大学助手）